



5月21日、 日本で金環日食が観測できる！

今年の5月21日は、日本の太平洋側の広い地域で金環日食（金環食）が見られます。太陽が環になって見えるという、非常に珍しい、あの金環日食です。太陽が細いリング状に輝き、前後数秒間はダイヤモンドリングも確認できます。しかも今回は離島ではありません。東京や大阪、名古屋など、太平洋側を中心とした広いエリアの大都市で見ることができるのです。日本では 8000 万人の生活圏で金環日食が見られるといえますから、期待は高まる一方ですね。

各地のおおまかな最大食時刻

鹿児島	7:22 頃
高知	7:26 頃
大阪	7:29 頃
名古屋	7:31 頃
東京	7:34 頃

金環日食は非常に珍しい天文現象です。

太陽の一部が欠けて見える部分日食は、数年に一度の割合でしか見ることができません。

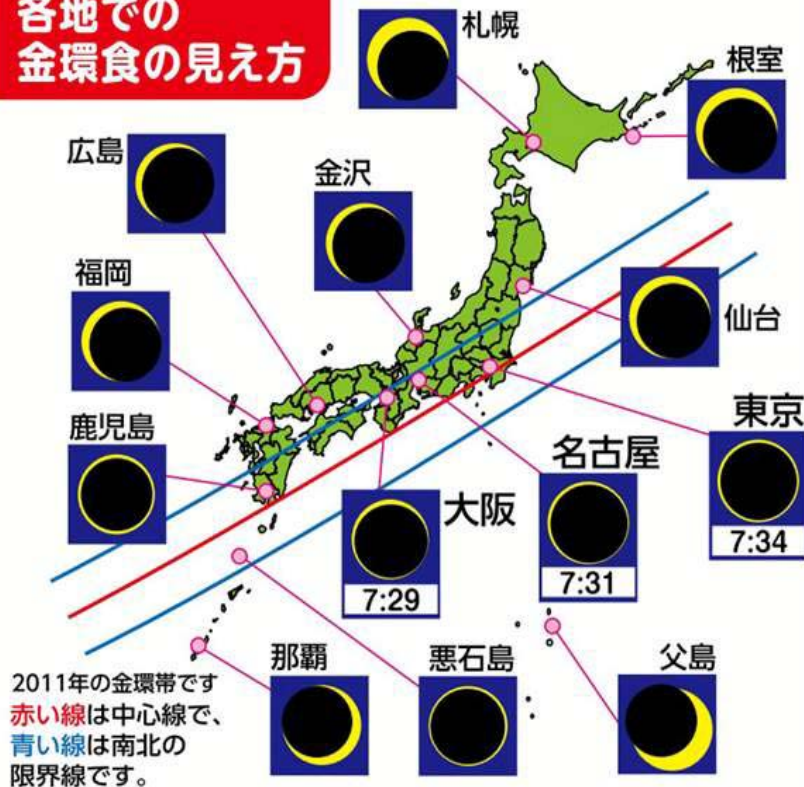
ましてや金環日食や皆既日食となると、日本という広い範囲でみて、十年から数十年に一度の頻度でしか起こりません。

前回日本で見られた金環日食は、

1987年に沖縄で観測されたもので、25年前の話です。また、次回は18年後の2030年6月1日に北海道で見られます。



各地での 金環食の見え方



ところが場所を限定すると話は違ってきます。同じ観測地点に居続けたとすると、数百年に一度しか見ることができないという、非常に珍しい天文現象になってしまいます。金環日食は一生に一度見ることができたら運がいい方といえるでしょう。例えば、東京で前回見られたのは今から173年前の1839年のことです。また、2012年以降で次に東京で見られるのは、ちょうど300年後の2312年のことになります。

☉金環日食とは

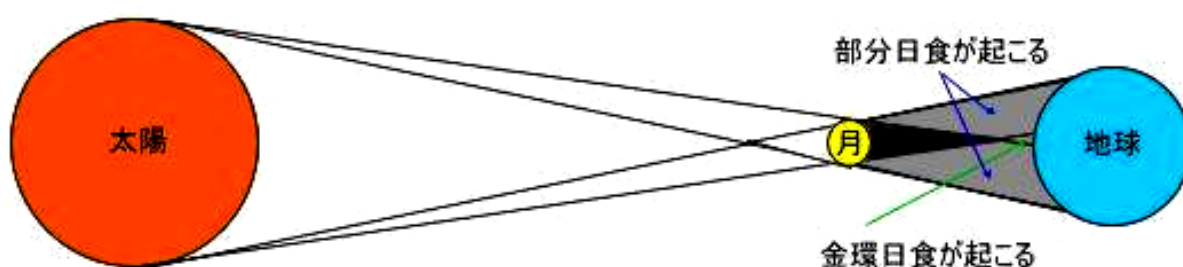
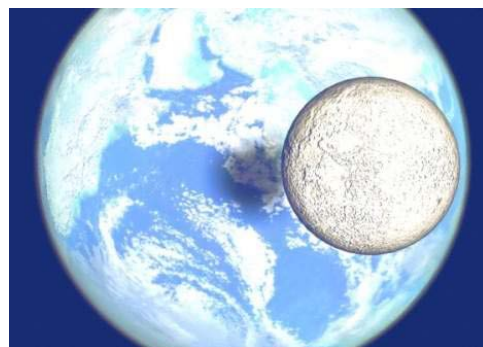
日食は太陽が月によって隠されることにより、太陽が欠けて見える天文現象です。

月の見かけの大きさが太陽よりも小さい場合、月が太陽の内側へ完全に入り込むと、太陽は細いリング状に見えます。これを金環日食、または 金環食とよんでいます。

ですから金環日食は、日食の中でも特別な日食といえることができます。5月21日はまさに、下の絵のような状態になります。

月の本影の面積は地球全体の面積に比べて極端に狭いので、金環日食が見られる地域は地球上のごく一部に限られてしまいます。

今年は運よく日本が月の本影に入るといわれています。



☉安全に日食観察をするために

日食中の太陽は月に一部が隠されているとはいえ、強い光と熱を発していることに変わりはありません。たとえ食分が0.9を超えても、金環日食になっても同じことが言えます。正しい方法で観察しないと、楽しい日食観察が行えないばかりか、目を傷めたり失明の恐れがあって大変危険です。

安全に観察するためには太陽の光を減光する必要がありますが、目に見える光（可視光線）を減らすだけでは不十分です。目を損傷する恐れのある赤外線や紫外線をカットしないと意味がありません。



黒い下敷きを使ったり、サングラスをかけた程度では対策不十分です。

日食観測用に作られた市販の「日食グラス」や「日食メガネ」を用いるのが一番安心です。

2009年7月22日の部分日食のときは、日本中で売り切れたそうです。

今回はさらにヒートアップしそうですから、早めに準備しておきましょう。



☉2012年以降に日本で見られる金環日食

2041年10月25日	金環日食	近畿地方の北東部、中部地方の南西部
2074年1月27日		種子島、屋久島、薩摩半島南部、大隅半島
2085年6月22日		沖縄本島の大部分、南大東島
2095年11月27日		中国地方、四国地方、近畿の南西部

ようやく春ですね！庭木を植える好期です

【庭木の手入れ・春】

庭木の植え方

大きな庭木は植木屋さんに植えてもらったほうが無難ですが、苗木や低木などは自分で好みの場所に植えて庭造りの醍醐味を味わってみましょう。

居間に座って、あるいは門から玄関を眺めて、この辺にこんな木が欲しいなと感じた場所に植えるのが効果的です。



まず根鉢より大き目の植え穴を掘り、植木を入れて元あった深さになるように底を調整します。

庭木をすえて8分目くらい土をかけ、ここへ水をたっぷり与えて棒で突き固め、土を根の周りによくいきわたせられます。こもやわらなわは植える時に取り外しておいた方が春植えでは安全です。

こうして元の高さまで土をかけたら、株の径より大きめに円形に土を盛って中央を低くした水鉢を切り、ここへもう一度たっぷり水を与えます。

この方法は水ぎめといって、大抵の庭木を植える方法です。マツやナンテンなどはこの方法と違って、水を使わないで植える土ぎめが普通です。

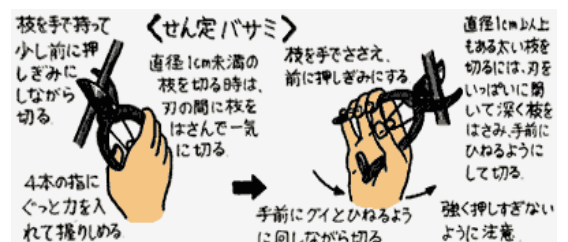
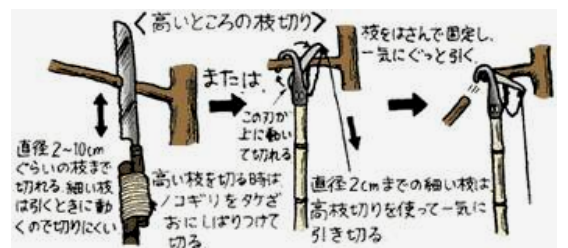
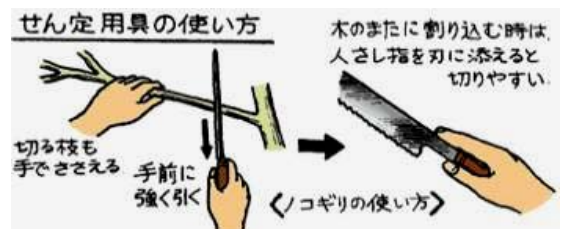
今植えられる樹木

＜常緑樹＞

アオキ、アセビ、イヌツゲ、オオムラサキ、カイズカイブキ、カクレミノ、シラカシ、カナメモチ、キョウチクトウ、キャラボク、キリシマツツジ、クチナシ、クロマツ、サザンカ、サツキ、ジンチョウゲ、スギ、シャクナゲ、ツバキ、ナンテン、ヒイラギ、ヒイラギナンテン、ピラカンサ、マサキ、モチノキ、モッコク、マンリョウ、ムベ、モクセイ、ヤツデ

＜落葉樹＞

アキニレ、アジサイ、エニシダ、ウメ、ウメモドキ、ウツギ、オオデマリ、カイドウ、カエデ、ギョリュウ、コデマリ、コブシ、サンショウ、シジミバナ、シラカバ、トサミズキ、ニシキギ、ニワウメ、ハギ、ハナズオウ、ハナミズキ、フジ、ボケ、ムラサキシキブ、モクレン、ヤマブキ、ライラック、ロウバイ

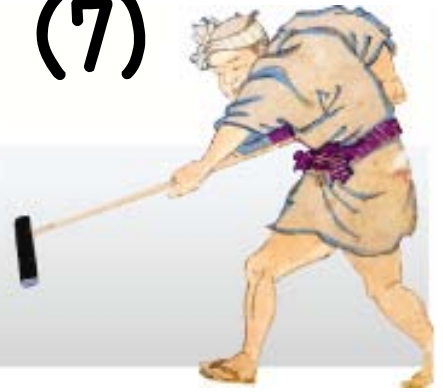


道具よもやま話 (7)

道具よもやま話

7

消えた
道具の町・伏見



京都の伏見に、15～6代続いている谷口清兵衛金物店がある。大工道具館で入手した今日では使われていない古い形の鋸に、当店の刻印があり、いつの頃のものを調べるために嘉来さんとお訪ねした。

伏見は、豊臣秀吉の桃山城築城の頃から鍛冶の町として知られた所であり、伏見鋸が特に有名であった。

江戸時代中頃、ここから会津や新潟三条、江戸へと技術が伝えられたという。

当主の清兵衛（本名・泰通、大正3年生）さんも40才代の頃までは、鋸を造っておられたが、時代に押され、人手不足からや

むなく仕事を閉じて金物商として古い暖簾を守っておられる。戦後までは数軒残っていた鍛冶場も谷口家を最後に、伏見から鍛冶の町の名が消えて行った。谷口家は、代々道具を造るばかりでなく、これを諸国に手広く卸す商いもされており、中屋家とともに伏見鍛冶の中核として、暖簾に残る「総本家 藤原」の文字にその辺の歴史が残っている。

問題の鋸は鹿児島出身の大工さんから入手したもので、当家では薩摩とは取引があったとのこと、明治維新の折には薩摩の志士たちの出入りも多く、西郷隆盛も泊まったそうである。この鋸もその頃からの因縁かも知れない。

帰り際に当家に残った最後の古い鋸1丁をいただいた。

この読み物は、竹中大工道具館元副館長・嘉来園夫ならびに元館長補佐・西村治一郎の2名が主となり、「道具・よもやま話」と題して竹中工務店社報（1983年発行）に連載したものを、

改めてここに転載したものです。

30年前の記述のため、古くなった内容もございますがご容赦下さい。